

分布、淡路の蘚苔類の分類と分布についてまとめられ、Entodontigae をはじめとする20種に余るコケの新種を発見されている。また、『貝類異同弁』、『蘚苔類異同弁』は、初心者の手引書としての先生の労作である。先生の採集された蘚苔類標本1,000種をはじめ貝類、カニ類、化石など貴重な標本が槌賀研究室に大切に保管されている。

先生の生物教育のモットーは、現在もそのまま通ずる哲学であり、我々は、この教えを受け継ぎたいものである。(しみず じゅん)

### 三浦佳文元会長の逝去を悼む

森本 義信

戦争は、5年間先生から教育現場や生物学の勉強を遠ざけた苦痛の歳月であった。昭和16年6月、第一東京市立中学校の食堂で昼食前の全校生徒に、あわただしく出征の挨拶をされ、郷里の兵庫県へと発たれた。間もなく、中国中部(中支)の前戦へ送られ、一兵卒として辛酸を舐められることになった。先生はあえて幹部候補生の志願をされなかったのも、御苦労はひとしお厳しいものであった。同じく兵卒として中国へ出征された御経験もたれるミズダニ類の今村泰二博士(茨城大名誉教授)とは、同じ境遇を共有した同年代の研究者として、互いに肝胆相照らす交流をもたれていた。昭和21年7月復員。折からご尊父病臥、近くで看病をせねばと、翌春、郷里に帰られ、母校の兵庫県立龍野高校で教鞭をとられることになった。

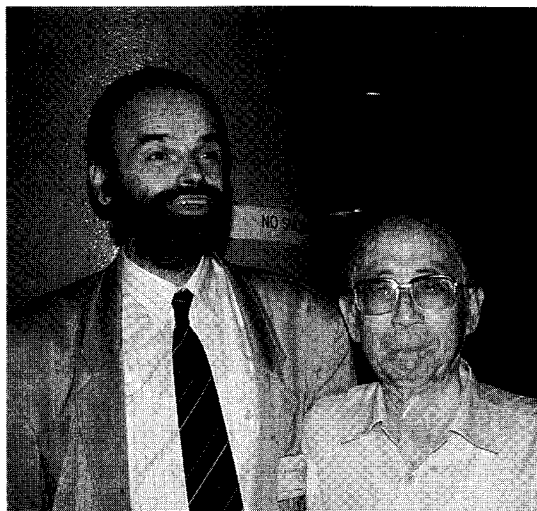
昭和24年頃、生徒が学校へ持参した井戸水の白いエビに関心をもたれ、25年の秋頃から龍野高校の南2キロ余りにあった相生市水源地の原水が地下水であったことから採集を始められた。これが、日本での組織的な地下水動物研究の幕開けになったのである。採集される動物の多くが、日本では初めてのもので、同水源地が正基準産地となった新種の数は次のとおりである。

ソコミジンコ類	13種
ケンミジンコ類	4種
ムカシエビ類	2種
ミズムシ類	2種
ミズダニ類	23種
ゲンゴロウ類	2種
合計	46種

また、先生が記載された新種の数は、次のとおりである。

ソコミジンコ類	1新属と14新種
ムカシエビ類	1新属1新種

先生は、龍野高校時代、学校にお訪ねすると、放課後は生物準備室で顕微鏡を覗いておられることが多く、殊



シュミンケ博士(左)と三浦先生(右)

に採集物のうち、ケンミジンコ類は個体数が多いにもかかわらず、1個体ずつ検鏡して種分けをしておられた。これらの結果は、残されていた先生の記録物から、別文の論文にさせていただいた。これは、地下水動物の季節的变化を述べる世界で初めての論文である。先生は研究が中断することを案じながら、姫路西高校へ教頭として赴任された。しかし、先生は見事に割り切って、校務を終えられたら放課後は、殆ど生物準備室に籠もって、ソコミジンコ類の研究に遅くまで取り組まれた。この間の研究物には未発表のものが多く、これらをかかえて加古川西高校へ校長として赴かれた。折しも、大学紛争の嵐が高校へも降りてきて、同校は県下でも激しい紛争の拠点校になっていた。先生は、それでも研究を続ける覚悟で校長室へ顕微鏡を持ち込まれたが、意にかなわず、荒れ狂う紛争に毅然として立ち向かわれた。

校長職に専念されること5年、先生が身をはって対決された結果、ご退職時には立派に正常化し、見違えるような学校に立ち戻ったのである。この業績が認められるところとなって、昭和47年秋、文部省から教育功労章を授与された。

さて、退職後は研究の再開とばかり、ご自宅に研究室を作られ、毎夜遅くまで、検鏡、作画、届いた文献の整理など、喜々として励まれた。研究室には多くの図版などが残されていた。これらの資料は、ソコミジンコ類の研究者、茨城大学の菊地義昭博士に、研究の継続を依頼した。やがて、同氏から、内外多くのソコミジンコ類の研究物が発表されることと思われる。更に、これからの研究者のためにと、日本のソコミジンコ類を後掲の論文著書目録のとおり、『中国/日本・淡水産橈脚類』と、『日本淡水動物プランクトン検索図説』にまとめられた。

また、平成2年夏に、軽井沢で開かれた国際カイアシ類(橈脚類)学会に参加され、世界の第一人者ドイツのオルデンブルグ大学教授シュミンケ博士と、寝食をともにしながら親交を深められた。この国際学会は、先生の生涯にとって最も楽しく、最も充実した日々であったらしく、その後もしばらくは、想いだされては、シュミンケ博士の話がされた。

一昨年8月上旬、かねてからの肝臓疾患治療のため、県立循環器センターに入院された。先生の肝臓疾患は、昭和52年3月胃の全摘出手術の際の輸血が原因で、肝炎を患われた。肝炎は肝硬変へと進み、既に手の施しようもなく、平成5年9月24日遂に帰らぬ人となられた。今や幽明境を異にして、再び先生の温かなお姿に、真摯なご研究のお姿に接することが出来なくなりました。ご冥福を心からお祈りしつつ筆を置きます。安らかにお眠りください。

#### 〈三浦佳文先生の略歴〉

大正2年3月24日 龍野市蒼田町福田に生誕  
昭和4年3月 兵庫県立龍野中学校卒業  
昭和9年3月 東京高等師範学校理科三部卒業  
昭和9年3月 埼玉県立浦和中学校教諭  
昭和16年3月 第一東京市立中学校教諭  
昭和16年6月~21年7月 応召  
昭和23年3月 兵庫県立龍野高等学校教諭  
昭和25年秋~ 地下水動物の研究を始める  
昭和38年4月 兵庫県立姫路西高等学校教頭  
昭和43年4月 兵庫県立加古川西高等学校校長  
昭和44年4月~48年3月 本会会長  
昭和47年10月 学制百年記念文部省教育功労章受賞  
昭和48年3月 定年退職  
昭和63年5月 叙勲 勲四等瑞宝章  
平成5年9月24日 肝硬変のため逝去

#### 〈三浦佳文先生 論文著書目録〉

MIURA, Y., 1962. Three new harpacticoid from the subterranean waters of Shikoku in Japan. *Jpn. J. Zool., Tokyo*, 13 : 267-274.  
MIURA, Y., 1962. Subterranean harpacticoid copepods of the Amami Group of the Ryukyu Islands. *Annot. Zool. Japon., Tokyo*, 35 : 95-105.  
MIURA, Y., 1964. Subterranean harpacticoid copepods from a driven well in Japan. *Jpn. J. Zool., Tokyo*, 14 : 133-141.  
MIURA, Y., 1969. A new harpacticoid copepod from a sandy beach of Lake Biwa. *Annot.*

*Zool. Japon., Tokyo*, 42 : 40-44.

三浦佳文：日本の Harpacticoida (ソコムジシコ類)。『中国/日本・淡水産橈脚類』500-563。たたら書房、鳥取。(1984)。  
三浦佳文：ソコムジシコ目。水野寿彦・高橋永治(編)。『日本淡水動物プランクトン検索図説』51-97。東海大学出版会、東京。(1991)。  
三浦佳文・森本義信：Bathynellidae の日本における発見。『科学』21 : 589-590。(1951)  
MIURA, Y., & Y. MORIMOTO, 1953. Larval development of *Bathynella morimotoi* UENO. *Annot. Zool. Japon., Tokyo*, 26 : 238-245.  
三浦佳文・森本義信・横田利彦：生きた化石 県下の地下水動物。『兵庫県生物誌』[兵庫県生物学会], 43-47。神戸新聞社、神戸。(1956)。  
MORIMOTO, Y., & Y. MIURA, 1957. *Allobathynella japonica* gen. et sp. nov., a new Bathynellid from Japan. *Proc. Japan Acad., Tokyo*, 33 : 145-148. (もりもと よしのぶ：常任理事)

## 生物学会の屋台骨を強くした渋谷久雄先生

平畑 政幸

渋谷久雄先生は、戦時中に主計将校としてフィリピンで活躍され、復員。再出発をはじめられたのが、当時、紅谷進二先生が校長をされていた明石女子商業学校で、創立総会の後であった。

嘱望されて生物学会の会計を担当された。県立明石高校に移られて後、その実力を発揮されたのが、生物入試問題集を県内版として販売し、生物実験ノートの発刊の企画など、当時急速に頭角を現してきた数研出版との交渉であろう。

これが『高校生物ハンドブック』へと進展して、生物学会運営の大きな財源となり、会員の多方面の研修をすすめる原動力となった。渋谷先生の将来を見据えた慧眼のもたらしたものといって過言でない。

昭和24年『郷土の生物』(兵庫県生物学会編、神戸新聞社刊)は、兵庫県博物学会の活動とその研究成果として生まれたものであろう。

昭和35年発行の『兵庫の自然』(兵庫県生物学会編、のじく文庫発行)は、創立初期10年の成果を集成したものである。佐藤茂樹先生と渋谷先生の2人で編集を担当され、80人もの執筆者の原稿をガリ版刷りにして20回におよぶ編集会議で激論をたたかわせ、あるものは現地でも再調査、原稿の書きなおしがあったり、学究的な気風のなかで、産声をあげたことをうかがわせる。これが良い伝統になり、その後の『続兵庫の自然』『新兵庫の自